

オリンピック・パラリンピック教育の展望

ーオリンピック・パラリンピックに関する教育プログラム講習の実践からー

二 宮 雅 也 (文教大学人間科学部)

Outlook for Olympic and Paralympic Education : Based on Practice of Education Program Workshop related to the Olympics and Paralympics

NINOMIYA MASAYA

(Faculty of Human Sciences, Bunkyo University)

要 旨

本実践研究は、2020年東京大会を前に全国で展開されているオリンピック・パラリンピック教育方法を検討したものである。具体的には、2015年度、2016年度の2カ年において、教職を志願する文教大学生の希望者に対して、オリンピック・パラリンピック教育の基礎を概説し、その後、経験的な学習やグループワークを通じて、教育プログラムの検討を行った。結果として、講習後の理解度が高まったとともに、具体的な授業内容が提案された。

1 はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピックを前に、オリンピック・パラリンピック教育（以下、オリパラ教育）の重要性が指摘されている。東京都では、平成28年1月に「東京都オリンピック・パラリンピック教育実施方針」を定め、その意義や具体的な枠組みを定めている。またスポーツ庁においても、筆者も委員を務めた「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議」を開催し、各機関におけるオリンピック・パラリンピック教育の推進のための方策等を示している。さらに、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は、東京2020教育プログラム（愛称「ようい、ドン！」）を設定し、学校だけではなく政府、東京都、全国の地方公共団体、スポンサー企業、教育機関等が全国各地で教育の取組を展開する方向性について示している。

オリパラ教育を明確に定義することは難しいが、国はその目的を以下のように示している。

オリンピック・パラリンピック教育は、オリンピック・パラリンピックを題材にして、

- ①スポーツの意義や価値等に対する国民の理解・関心の向上
 - ②障害者を含めた多くの国民の、幼少期から高齢期までの生涯を通じたスポーツへの主体的な参画(「する」、「見る」、「支える」、「調べる」、「創る」)の定着・拡大
 - ③児童生徒をはじめとした若者に対する、これからの社会に求められる資質・能力等の育成を推進することを目的としている。
- (オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告：4)

こうした展開のなかで、その目的を達成するためには、言うまでもなくオリパラ教育の一端を担う各種学校の教員の役割が大きい。

特に、東京都では「オリンピック・パラリンピック教育推進校」（平成26年度300校、平成27年度600校）を指定し、各学校が創意工夫した取組を展開するよう支援している。また、平成28年度にはオリパラ教育を普及・啓発することを目的として、公立学校（園）全体をけん引する役割を担う学校を「オリンピック・パラリンピック教育重点校」として指定し、先進的取組や特色ある取組を組織的に行っている。

さらに、オリパラ教育を展開するなかで、大学や社会教育との連携も重要になってくる。国はその考え方として以下を示している。

東京大会に向けた全国的な機運の醸成等を進めるためには、地域住民のオリンピック・パラリンピックに関する理解を深め、地域社会全体における関心や取組の充実を図ること

が重要であり、そのためには、学校教育のみならず、公民館・区民ひろばや青少年教育施設をはじめとする社会教育施設等で行われる社会教育を充実するとともに、放課後や土曜日等に地域との連携・協働により行われる様々な活動に幅広い地域住民の参加を促進することが必要である。

（オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告：18）

文教大学は、小学校・中学校教員養成数ともに私立大学全国第1位の大学であり、埼玉県、千葉県、東京都を中心に多くの学校教員を輩出している。また、人間科学部には生涯学習を専門とするカリキュラムもあり、社会教育界で活躍する人材もこれまで多く輩出してきた。しかし、現在の教育カリキュラムの中で、オリパラ教育を担えるだけの基礎的要件は十分に満たされていないのが現状である。

表1 平成 27(2015)年度開催日時、受講者数、講習内容

開催日時	受講者数	講師	講座内容
1 月 24 日(日) 10:00～12:00	6名	二宮雅也 (人間科学部教員)	現代社会におけるオリンピック・パラリンピック ・オリンピズムとは ・古代オリンピックから続く歴史 ・オリンピック・パラリンピック教育の概要
1 月 31 日(日) 13:00～17:00	17 名 (現役教員含む)	谷口広明 (日本スポーツ振興センター)	オリンピック・パラリンピックの諸問題と展望 ・外部講師によるパラリンピックの概要 ・障害者スポーツの実践について
		二宮雅也 (人間科学部教員)	具体的なオリンピック・パラリンピック教育 ・方法グループワーク(教育内容の構築)

表2 平成 28(2016)年度開催日時、受講者数、講習内容

開催日時	受講者数	講師	講座内容
10 月 30 日(日) 14:00～17:00	6名	二宮雅也 (人間科学部教員)	現代社会におけるオリンピック・パラリンピック ・オリンピズムとは ・古代オリンピックから続く歴史 ・オリンピック・パラリンピック教育の概要
12 月 18 日(日) 14:00～17:00	32 名 (現役教員含む)	二宮雅也 (人間科学部教員)	障害者スポーツとパラリンピック ・パラリンピックの概要 ・障害者スポーツの体験(シッティングバレー) ・グループワーク(教育の課題と方法)
1 月 29 日(日) 14:00～17:00	26 名 (現役教員含む)	鈴木邦雄 (認定 NPO 法人日本盲人マラソン協会)	外部講師による伴走教室 ・伴走のポイント ・伴走体験
		二宮雅也 (人間科学部教員)	これからのオリパラ教育を考える ・方法グループワーク(教育内容の構築)

そこで、平成27（2015）年度、平成28（2016）年度学長調整金（特定課題支援：東京オリンピック・パラリンピック連携事業枠）を活用し、「オリンピック・パラリンピックに関する教育プログラム講習」を開催し、将来教職を目指す学生を対象としたオリパラ教育に関する講座を開催することとした。

2 講座概要

2-1 目的

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催を4年後に控えた今日、小中学校においては具体的なオリンピック・パラリンピック教育が展開されつつある。また、2014年6月23日には2020年東京大会組織委員会が、全国の大学・短期大学と連携協定（以下、大学連携協定とする）を締結し、本学においても連携大学としてオリパラ教育の推進が求められている。また、多くの教員を養成している本校において、オリンピック・パラリンピック教育について、多角的理解と実践力を要す

る教員を養成することは、大学としての責務の一つであり、連携協定における本学のオリジナリティを示す契機となる。よって、本事業は「オリンピック・パラリンピックに関する教育プログラム講習」を開催し、オリンピック・パラリンピック教育に関して多角的視点と、即戦力を持った教員を養成することを目的としている。

2-2 講座開催日時、受講者数、講座内容

本講座における、講座開催日時、受講者数、講座内容は表1、表2の通りである。

3 結果

3-1 講座前と講座後の意識変化

講座開始前に、受講生に対して（1）オリンピックに関する知識、（2）パラリンピックに関する知識、（3）オリパラ教育の実践について意識調査を行った。（1）（2）については、「1.全くない、2.あまりない、3.どちらでもない、4.少しはある、5.十分にある」、

表3 講座前の意識(2015、2016年度)

質問項目	2015年度 (n=16)	2016年度 (n=36)
(1)あなたはオリンピックについて、どのくらい知識がありますか。	2.19	2.50
(2)あなたはパラリンピックについて、どのくらい知識がありますか。	2.00	2.19
(3)あなたは教員として、どの程度、オリンピック・パラリンピック教育を行うことができますか。	1.69	1.72

表4 講座後の意識(2015、2016年度)

質問項目	2015年度 (n=17)	2016年度 (n=22)
(1)あなたはオリンピックについて、どの程度理解することができましたか。	4.06	4.14
(2)あなたはパラリンピックについて、どの程度理解することができましたか。	4.06	4.19
(3)講習を受講して良かったと思いますか。	4.88	4.95
(4)オリンピック・パラリンピック講習の必要性はあると思いますか。	5.00	4.91

(3) については、「1.全くできない、2.あまりできない、3.どちらでもない、4.少しはできる、5.十分にできる」の5件法で調査を行った。結果は表3の通りである。

表3の通り、(1)のオリンピックに関する知識は2015年度2.19、2016年度2.50、(2)のパラリンピックに関する知識は2015年度2.00、2016年度2.19、と低い結果であった。また、(3)オリパラ教育の実践については、2015年度1.69、2016年度1.72、とかなり低い状況であった。このことから、学校等で展

開されるオリパラ教育の担い手である教員は、その知識や実践力について十分でないことが把握された。

講習後、どのくらい必要知識や実践力が養われたかを把握するために意識調査を行った。

(1) オリンピックについての理解度、(2) パラリンピックについての理解度、(3) 講習を受けて良かったか、(4) オリパラ教育講習の必要性について調査を行なった。(1) (2) については、「1.全く理解できなかった、2.あまり理解できなかった、3.どちらでもな

表5 グループワークによって構築されたオリパラ教育の内容と方法(2015年度)

班	校種	取り組み案
A	小①	<p>「世界記録に挑戦しよう」 領域: 体育 (1) 100mの世界記録である9.58秒の中で、自分は何m進めるのか体験→楽しさを味わえる! (2) ボルトの走りやパラリンピックの100mの選手の走りを見ることでオリパラ教育につなげる。 (3) オリンピックを模倣して、学年男女それぞれの競技記録に沿って、金銀銅メダルを与え、校内で掲示。 →最終的に学校に日本記録保持者を招いた際に、「それぞれの金メダルを保持している児童が、その選手に挑戦しよう」ということで挑戦したら、体験しながら楽しめるのではないかな。 <メリット> ★ 特別な教材を揃える必要がない。 ★ 幅広く競技に挑戦できる。 ★ 学習指導要領内で行なえる。</p> <p>「オリンピックかるた」を作ろう 領域: 総合的な学習の時間 (1) まずは「国旗」のかるたを作成することで、国旗から世界を知る。 (2) その後、それぞれの国は「どんな国なのか」ということについて調べ学習を行う。 初めは、ある程度知っている国(ex.アメリカなど)を調べる児童が多いと予想。 →「この国みんな知らないけど調べたらみんなが知れるね」などと声かけを行うことで、あまり知られていない国に関しても調べていけるように促す。 (3) 最終的に、それぞれの国のバックグラウンドや国の状態が「読み札」となり、一人一人の調べたことが「オリンピックかるた」となって完成する。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; background-color: #0070c0; color: white; padding: 10px; margin: 5px;">国旗のかるた作成</div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; background-color: #0070c0; color: white; padding: 10px; margin: 5px;">それぞれの国について調べ学習</div> <div style="font-size: 2em; margin: 0 10px;">➡</div> <div style="border: 1px solid black; background-color: #0070c0; color: white; padding: 10px; margin: 5px;">オリンピックかるた完成</div> </div> <p><メリット> ★ 興味関心を誘いやすい。 ★ 世界の国々について体験的に触れられる。 ★ 誰でも取り組みやすい。 ★ 内容を工夫すれば、1～6年生まで取り組める。</p>
B	小②	<p>「世界中の人が楽しめる競技場を作ってみよう」←ゴール(目標)「興味を持ってもらう」 領域: 総合的な学習の時間 (1) 3・4人くらいでグループになり、各グループに模造紙やペンを用意。 (2) 事前に、世界各国の特徴や文化をまず押さえる。</p>

		<p>(3) 様々な国から多くの人々が来る競技場であることを理解し、その人たちが使いやすい競技場やおもてなしなどを考えて競技場の細かいところまでデザインする。→作業の中で、多様な文化を持つ人々同士で交流することも難しいことだということに気がついてもらいたい。</p> <p>(4) 最終的に 2020 年東京大会の競技場案(現時点で決定した国立競技場のデザイン)に触れ、この国はどういう配慮があるのかなどという話にも触れる。</p>
C	小③	<p>テーマ:交流</p> <p>領域:様々な教科で連携(ex.英語・体育・総合的な学習の時間)</p> <p>体験を実際にさせることで、子どもたちに印象付ける。→興味関心を持たせる。</p> <p>年間 35 時間では限界があるので、他の教科に連動させながら、オリンピック・パラリンピックを絡めていく。</p> <p>①英語:オリンピックでは道案内をする場面が増えるという予想。 英語の授業で「今日は道案内の勉強をするよ」ではなく、「オリパラでいろんな国の人たちが来たら、道案内しなきゃいけないよね」という風に絡めて、「じゃあ今日は道案内を実際にやってみようか」という設定で行う。</p> <p>②体育:講師を呼んで実際に競技を体験(ブラインドサッカーなど)</p> <p>③総合:障害者との交流・体験 →学年を問わず、低学年からやることで、障害などに対する抵抗を生まないように。しゃべる・一緒に遊ぶことで、「自分たちと同じだ」ということを知ってもらえる機会を多く作る。</p>
D	中	<p>教員側の目標:一年間を通して共生社会をつくる人を育てる。←キャリア形成という視点</p> <p>(1) 実際に競技をしている人(できればパラリンピック選手など)の講義を行う。→障害者スポーツなどへの理解を促す。</p> <p>(2) 中学校の現場でも、福祉の単元の中で障害者などから話を聞く機会があるので、現場を知る・生の声を聞く。</p> <p>(3) その後、実際に生徒たちにバラスポーツを体験させ、普段自分たちが行っていることとは違う感覚を味わせていく。</p> <p>(4) その感覚を最終的にオリンピック・パラリンピックの映像と共に気づかせていく。 「実際の選手たちはこういうことをやっているんだ。」 →ICT などを使用した映像などで、「障害を抱えるきっかけ」などの深いテーマにも踏み込み、社会全体としてそういった障害を抱えざるをえなかった人たちもオリンピック・パラリンピック選手として活躍しているという視点を持たせる。←基本的にはワークシートを使用 そこから「2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けてできることは何なんだろう」という視線を持たせる。 →調べ学習などを通して、「日本人として」どのように関わっていくべきなのかという視点を持たせる。 →「じゃあ自分たちの地域ではどういうことが行われていくのか」というところまで深めさせていくことで、最終的に共生社会について考えていくことができる。「様々な人がいる中で、自分として、日本人としてどういう風にあるべきなのか」ということをまとめていく。</p>
E	特支	<p>障害の程度が生徒によって様々であるが、日常生活につなげることが生徒にとっても大切。</p> <p>領域:生活・体育・数学・音楽・就労支援など</p> <p>生活:「オリンピック・パラリンピックについての絵を描こう。」</p> <p>体育:バラスポーツ(ex.ボッチャ)を実際にやってみよう。</p> <p>数学:オリンピックイヤーを迎えた時の実践として、 「電車に乗っている人間の日本人の割合・外国人の割合どっちが多い?少ない?」</p> <p>音楽:民族の音楽を聞く。</p> <p>もう一つ一番つなげなければならないものとして...<u>就労支援</u> (今の生徒が 4 年後は普通に働いている年頃) →自分たちが働き始めた時、その事業所で作っているのは何だろう? それらが日本の人たちだけではなく、外国の人も多く使うようになるだろうということを考える。 街に行ってみて、スーパーの品ぞろえを見て、「これは外国の食べ物だね。なんで最近になって外国のものが増えてきたんだろうね。」ということを考えるきっかけを作る。子どもたちが、社会貢献をしていく中でオリンピックが近づくにつれて、働く意欲や「なぜこれをやっているのか」ということが日常的にわかるような就労支援を行う。</p>



図 1 講習の様子(2015 年度)



図 2 グループワーク後の発表(2015 年度)

表 6 グループワークによって構築されたパラリンピック教育の課題と方法(2016 年度 2 日目)

班	教育の課題と方法
1 班	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックに対する子どもの認知度が低い。 ・パラリンピックを見たことがない子どもがたくさんいる。 ・そもそも子どもたちがスポーツを身近に感じていない。よって、注目度が上がっていない。 ・大人との間にスポーツに関する意識のギャップが大きい。 <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な教材を扱う。体験活動としてパラリンピックの競技をやってみる。
2 班	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「パラリンピック」を全面的に出していくことが課題であり、そのためには体験が必要で、どういった内容で体験させるかが重要。 <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーとしてパラスポーツ選手を呼ぶのはインパクトがあって良い。 ・障がいを持つ人との交流を通じて、子どもたちに障がいについて認識させる。 ・低学年から障がいを持つ人との交流を取り入れる。 ・技術面(義足・ユニバーサルデザイン等)から学ぶ。
3 班	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がいと健常で区別する認識がそもそも違うのではないかな。 ・「共生」という心を育てる難しさ。 <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい者がスポーツをすることの結果だけで、「すごいね」と感動物語にするのではなく、苦勞など、過程を伝えることが重要。
4 班	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まず、教員自身が学びを深めることが重要。 ・講習で体験したシッティングバレーの方法なども、教員が実際にやっておかないとできない。 ・健常者はオリンピック、障がい者はパラリンピックという区別が、より差を大きくしている。 <p>方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員自身がちゃんとした価値観を持つことが大切。 ・子どもたちの意思を尊重し、参加できる教材を提供することが重要。
5 班	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員同士で教える側の中でもゴールがはっきりしていない。よって、クラスによって内容にばらつきが出てしまう。 ・「パラ選手すごい」で終わらない授業にしなければならない。 ・子どもたちの中でオリパラが他人事、テレビの中の出来事になっている。

	方法 ・興味を持たせ方として、突然「アイマスクをつけて走ってみよう」など、実体験から始めてみる。 ・障がいのある方々を受け入れる気持ちを育て、障がいのある方とどう関わっていけばいいのかという ことを考える気持ちを育てるために、オリパラ教育を大会が終わってからでも継続する。
6 班	課題 ・オリンピックは地方の人ほど距離があるため、当事者意識を底上げする必要がある。 ・みんなが活躍できる場など、共生社会を学ぶ授業が必要。 ・注目度がオリンピック＞パラリンピックであるという風潮を崩していく必要がある。 ・教育そのものにおいて、できる子だけが活躍しがち。みんなが楽しめる環境を作っていく努力が、共生社会につながっていくのではないかと。 方法 ・幼稚園など小さいころから共生社会の教育を行う。 ・保護者など、大人にも教育していくことが必要。

い、4.少しは理解できた、5.十分に理解できた」、(3)については、「1.全く思わない、2.あまり思わない、3.どちらでもない、4.少し思う、5.とてもそう思う」、(4)については、「1.全く必要ない、2.あまり必要ない、3.どちらでもない、4.少しは必要、5.とても必要」の5件法で調査を行った。結果は表4の通りである。

表4の通り、(1)のオリンピックに関する理解は2015年度4.06、2016年度4.14、(2)のパラリンピックに関する理解は2015年度4.06、2016年度4.19、といずれも高い理解度を示した。また、(3)講習の評価については、2015年度4.88、2016年度4.95、(4)講習の必要性については、2015年度5.00、



図3 グループワーク(2016年度 2日目)

表7 グループワークによって構築されたオリパラ教育の内容と方法(2016年度 3日目)

班	校種	取り組み案
A	小	<p><ブラインドサッカー体験> 領域:総合的な学習の時間</p> <div style="text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">①導入 目隠しなどの体験</div> ➡ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">②ブラインドサッカー 紹介</div> ➡ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">③講師をお呼びして ブラインドサッカー体験</div> ➡ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">④他学年の児童に 教える・伝える</div> </div> <p>①目が見えない体験や、視覚障がい者に対する指示などの難しさの理解など、身近なところから導入。 ②競技や選手の紹介をする。それによって、児童にパラリンピックを味わってもらう。 ③実際にブラインドサッカーを体験する。可能であれば講師を呼び、正確なブラインドサッカーの体験を行う。 ④自分たちの体験を、他学年の子たちに教えたり伝えることで、ブラインドサッカーをより身近なものに考えていけるようにする。</p> <p>【その他に...】 ・パラリンピックに目を向けて、他種目やマイナーな種目などを調べ、障がいとの関わりを学ぶ。 ・最終的にはグループ活動として、様々な種目の中からグループごとに一種目のある選手に応援メッセージを作成する。応援メッセージは障がいの理解と、そういう人にどうやったら応援を伝えられるかという思いやりの心なども育むことができれば良い。</p>

B	小(低)	<p>テーマ:「先生を助けよう」</p> <p>★ ロールプレイングを積極的に取り入れていく。</p> <p>★ 自分たちが<u>実際にその場面にあった時に、子どもが実践できるように...</u>というところに留意</p> <p>→身近なものから段階的に様々な要素を入れていき、「気づいたらできるようになっていた」というものを目指す。</p> <p>①身長など、児童にとって身近に感じられるような困った場面から始める。 例:「先生身長低くて『物が届かない』ってなったらどうやって助ける?」など</p> <p>②障がいの程度に応じた対応を学ぶ。 徐々にトイレや食事など、日常生活のことに置き換えていき、さらにスポーツにつなげていく。</p> <p>③そこで、低学年の児童が対象である為、「足が悪い」とか「目が見えないのにスポーツできねーよ!」などといった発言が予想されるが、それを自由に発言させた上で、「できねーよって言ったけど、どうかな?」という様に発言を拾っていき、児童に考えさせる。</p> <p>④そこからさらに、スポーツが出来ることは普通のことであり、障がいがあってもスポーツをやりたい人はいるというところに落とし込んでいく。</p> <p>※ロールプレイングはいくつか用意しておき、児童生徒の発言を取り込んでいって最終的にまとめていければ良い。</p>
C	小(低)	<p>課題:最近ではインクルーシブ教育などと言われているが、なかなかその学級の垣根は越えられていないと感じており、スポーツを通してその垣根を越えたいと考えている。</p> <p>ゴール:体験やゲストティーチャーの話を聞いて、一回だけで終わらせず、日常的・継続的に考え、日常生活でもそれを活かせるような児童を育てる。相手のことを考え、相手の立場になって考えることができるように。障害の有無や年齢・性別に関わらず、同じスポーツをするために、どのようにルールを改善したらいいかを考えられるようになってほしい。</p> <p>★ ゴールを達成するための手立て「〇〇オリンピックを開催(〇〇には学校名が入る)」</p> <p>特別支援学級と普通学級がある小学校を想定して...</p> <p>・特別支援学級の児童を交えて、スポーツを通してその交流を深めていきたい。 <u>そこで...「児童がルールを考える」</u></p> <p>・特別支援学級の子たちにも、合理的な配慮をする。 →少しルールを変えれば、同じスポーツも違ったやり方で楽しめる。 例:普通学級でも、男子と女子で試合を行う時に女子が得点2倍</p>
D	小(低)	<p>ねらい:パラリンピックの周知</p> <p>領域:体育(体つくりの単元)</p> <p>これまでのオリパラ講習を受けて...</p> <p>「オリンピックだけを教えるのではなく、通常の授業の中に取り込む」ということを考えた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>①鬼ごっこ → ②シットイング鬼ごっこ(全員で) → ③シットイング鬼ごっこ(不公平さを作って) → ④ルール決め → ⑤決めたルールで再度シットイング鬼ごっこ</p> </div> <p>①通常の鬼ごっこを行う。</p> <p>②範囲を決め、全員が(床に)お尻を付けたまま鬼ごっこをさせ、足を使わずに移動することの大変さを知る。</p> <p>③わざと不公平さを作って、鬼ごっこをさせる。 例:足を使える人を半分/足を使わないでシットイングの人を半分 など</p> <p>④不公平さを作ると、「ずるーい」とか「不公平だ」という児童がいることが予想される。そこで、「じゃあどうすればこうやってみんなが公平にシットイングしている人も立っている人も公平にできるんだろうか?」と働きかけ、ワークショップなどを行いながら児童にルールを考えさせる。</p> <p>⑤最終的にクラスのルールを決め、そのルールでもう一回シットイングの人と立っている人で鬼ごっこをさせる。</p> <p>→ルール次第で日常生活で障がいがある人もない人も遊べるようなことができるということを体感させる。また、パラリンピックのルールがある意義も同時に学ぶことができる。</p>



図4 パラリンピックの概要(2016年度 2日目)



図5 シットイングバレーの様子(2016年度 2日目)



図6 伴走教室(2016年度 3日目)



図7 グループワーク(2016年度 3日目)

2016年度4.91、といずれも高く評価された。

3-2 グループワークによって構築された教育方法

2015年度の講座2日目には、現役教員と学生を混合したグループを形成し、グループワークによってオリパラ教育の方法について検討を行い、小学校、中学校、特別支援学校の3つの校種から実際の授業方法についてその構築を行った。結果と内容については、表5の通りである。

グループワークの結果をみると、小学校では特に他国の文化理解やささまざまな人への配慮に焦点を当てた教育プログラムが検討されており、まさに、オリパラ教育の特徴が展開された内容となった。特に、B班によって提案された「世界中の人が楽しめる競技場を作ってみよう」は、さまざまな文化的背景の異な

る人たちがどのような観点で交流を促進することができるのか、あるいは、ダイバーシティ(多様性)の観点から何をどのように考慮することが大切なのかを前提にデザインするという意味で、学びの幅の大きい提案であった。また、E班は特別支援教育の観点から議論されており、教科別にどのような学びが可能なのかについて具体的に提案するとともに、卒業後の関わり方についても言及している。

2016年度の講座2、3日目には、講習の内容を踏まえ、現役教員と学生を混合したグループを形成し、グループワークによってパラリンピック教育に限定しその課題と方法について検討を行った。結果と内容については、表6、7の通りである。

特に共通して出された課題は、教員のパラリンピックに関する知識不足という見解であった。また、共生社会を意識した授業構築の困

難さについても課題が出された。具体的な授業展開等の方法については、障害者スポーツの具体的な実践（シッティングバレー、ブラインドサッカー等）を取り入れる、ロールプレイングを用いる、通常の授業でも内容を扱い、日常的な学びを構築する等が提案された。真田によれば、パラリンピック教育の明確な定義はなく、「オリンピックとパラリンピックを公平に扱おうとする傾向にあるが、障害をもつ人々全般にわたる多様なスポーツの教育的価値を追究していくような仕組みを考えなければならないだろう」と指摘している。特にパラリンピック教育を含む、障害者スポーツ教育全般に対するサポートは、急務である。（真田，2015:32）

3-3 ヒアリング調査結果

オリパラ教育は、2020年大会においてはじめて行われるものではなく、1964年東京大会や1998年長野大会においても行われた。そこで、その継続性の観点を調査するために、長野市内で小学校教諭を務めるK氏にヒアリング調査を行った。長野市内で展開されていた「一校一国運動」は、児童生徒の直接的な国際経験の機会を提供するものであり、市内75校で72の国や地域を担当するものであった。K氏の勤務する小学校もその1つであったが、約20年後の現在では、その継続はなされていなかった。

直接的な国際経験の機会は、現代社会を取り巻くさまざまな課題の学習としてもとても重要な視点である。オリパラ教育はその重要な機会を提供するきっかけにはなるが、大会が終了するとその継続が難しいことが把握された。改めて、その継続方法について課題が把握された。

さらに、中学校教育での展開を模索するために、新潟県十日町で社会科の中学校教諭を務めるM氏にヒアリング調査を行った。東京都内では機運醸成との重なりもあり、2020

年東京大会を意識している生徒も一定数いるものの、新潟県では少ないということもあった。また、各教員のオリパラを意識した授業運営を行っておらず、オリパラ教育は現状不十分であることが確認された。

ヒアリングの結果から、東京都を外れるとオリパラ教育の意識は教員の間でも非常に低いことがわかる。オールジャパンを掲げるならば、教育実践者の意識形成は言うまでもなく欠かせない。文部科学省やスポーツ庁、組織委員会のリーダーシップが問われると同時に、教員の教育的応用力にも期待したい。

4 まとめ

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決定し、学校教育の場ではその教材としての取扱いに関心と期待が寄せられている。多くの教員を養成している本学において、オリンピック・パラリンピックに特化した教育方法の検討を行うことは、将来教員として働く学生にとって新たな授業実践方法の獲得の場となるとともに、本学の責務の一つを果たすことにもなる。また、オリンピック・パラリンピックは今後も続く、国際的なイベントである。開催地に関わりなく、オリンピック・パラリンピックを通じた教育展開ができる教員を養成することは、将来的にも意義が大きいと考える。

しかし、今回の講習やヒアリングを通して明らかになったことは、前提としてオリパラに関する基礎的な知識が欠けているということである。メディアスポーツとして一般的になりつつあるオリンピックは、地球の裏側での出来事をリアルタイムにメディアで情報を収集し、時に自国のメダリスト誕生や世界記録の樹立等において記憶化されるものであり、それ以上も以下もない存在になっている。一方、パラリンピックに関しては障害者スポーツの祭典といった認識以上はなく、競技知識や選手も認知していることが少ない。また、

冬季大会についても認識が低い。

そもそも、私たちが日常生活を送る中で、オリパラは身近なものではない。急に東京大会が開催されるから急いでその知識を養わなければならないという、その連続性のない教育そのものに問題がある。日常からスポーツ教育が育まれ、世界各国で4年に一度開催されているそのテーマとしてオリパラが扱われていれば、もう少し私たちに身近なものになるのではないか。田原は「義務教育の段階から子どもたちがオリンピズムのエッセンスを理解し、行動できるようになる教育を推進していくことが重要である」と述べている。(田原, 2008:12) 国際情勢が多様化するなかで、国際社会の成員である一人としての認識を養うことも含めて、オリパラ教育の果たす役割はこれからも大きいと考える。

また、今回の講習では、オリパラを批判的に捉えて教育内容を構築する学生の姿勢は見られなかった。オリパラはこれまでも、これからも政治的にも経済的にも大きな課題(環境、開発、差別、ドーピング等)を考慮しなければならないメガ・スポーツイベントの一つである。課題に目を向けた教育内容の構築こそ、オリパラの将来を考える意味では、とても重要な取り組みである。

参考文献

荻原悟一・秋山大輔・瀧豊樹・木村公喜・大下和茂・佐久間智央・神力亮太・磯貝浩久「大学新入生を対象とした2020年東京オリンピック開催を基軸と初動教育の縦断的研究」『スポーツ産業学研究』26-1、2016、p.151-158

原田宗彦「2008年オリンピック招致活動とオリンピック教育」『スポーツ教育学研究』20-2、2000、p.145-148

木村華織・黒須雅弘・田中望・出口順子「「競技祭」を教材としたオリンピック教育の実践教育活動―「とうがく競技祭2014」

実践報告―」『東海学園大学紀要:人文科学研究編』20、2015、p.157-175

木村華織「イベント型オリンピック教育「とうがく競技祭」の実践―古代スタディオン走実施までの取り組み―」『東海学園大学教育研究紀要』1、2015、p.53-71

小林正泰「1964年東京オリンピックをめぐる道德教育の課題とその論理―国民的教育運動における公衆道徳と「日本人の美徳」―」『東京大学大学院教育研究科 基礎教育学研究室 研究室紀要』42、2016、p.135-145

宮崎明世「高等学校におけるオリンピック教育の実践研究:大学と付属学校の連携による授業実践から」『体育科学系紀要』、35、2012、p.91-101

中道莉央「中学校における体育理論の教材研究:パラリンピックに関する題材の場合」『北海道教育大学紀要、教育科学編』65-1、2014、p.267-277

根本文雄「特別支援教育におけるオリンピック教育の実践―総合的な学習の時間やキャリア教育の視点から―」『スポーツ教育学研究』34-2、2015、p.39-44

沼澤秀雄「全カリ主題別B科目で2020年東京オリンピック・パラリンピックを考えてみよう」『大学教育研究フォーラム』20、2015、p.58-61

オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告」、2016、p.1-32

真田久「オリンピック・ムーブメントとオリンピック教育」『スポーツ教育学研究』2-2、2015、p.29-33

清水泰生「東京オリンピック2020と日本語教育」『日本語教育方法研究会誌』21-1、2014、p.22-23

田原淳子・池田延行・今野賛・田中宏和・朴鍾鎮「ニュージーランドにおける学校保健

体育－日本におけるオリンピック教育推進
の手がかりを求めて－」『国士舘大学体育
研究所報』26、2007、p.43-48

田原淳子「オリンピックと教育－オリンピッ
ク競技大会誕生の背景とその今日的意義－」
『体育・スポーツ科学研究』8、2008、
p.7-12

田原淳子・池田延行「ニュージーランドにお
けるオリンピック教育－教師用資料「スポー
ツを通しての倫理」－」『国士舘大学体育
研究所報』28、2009、p.89-94

吉中孝志・海野勇三「実践記録:中学校体育
科におけるオリンピック教育の試み」『山
口大学教育学部附属教育実践総合センター
研究紀要27、2009、p.59-70

※この実践研究は、平成27（2015）年度、
平成28（2016）年度文教大学学長調整金
（特定課題支援：東京オリンピック・パラ
リンピック連携事業枠）を基に行われたも
のである。

また、講習の開催にあたり、文教大学大学
院人間科学研究科水野遥夏さんに協力いた
だきました。